

女性雑誌『VERY』にみる幸福な専業主婦像

石崎 裕子

＜ キーワード ＞

新・専業主婦志向、『VERY』、専業主婦、女性雑誌、主婦向け雑誌

＜ 要 旨 ＞

1998年版『厚生白書』で紹介された「新・専業主婦志向」は、「男は仕事と家事、女は家事と趣味（的仕事）」という新たな性別役割分業意識に基づいた20、30代の女性を中心とした専業主婦志向である。パートタイマーとして補助的労働に従事したり、いわゆるキャリアウーマンとして男性に伍して働きながら、家庭と仕事を両立させるくらいなら、経済力のある男性と結婚し、専業主婦として、経済的、時間的に余裕のある生活を送りたいという若い女性たちの選択肢の一つとしての専業主婦願望が、この調査結果から読み取れる。本論では、女性雑誌『VERY』を資料に用いて、女性の生き方の選択肢が曲がりなりにも多様化する中で浮かび上がってきた若い女性たちの専業主婦志向が、どのように描かれているかを明らかにしていく。家庭の経済的基盤を夫に支えてもらい、ランチやお稽古事を満喫する『VERY』に登場する幸福な専業主婦たちの姿は、「新・専業主婦志向」を見事なまでに体現している。

1. はじめに

1998年版『厚生白書』で紹介された「新・専業主婦志向」は、専業主婦という選択が、20、30代の若い女性たちの間でどのように受けとめられているかを考える上で、興味深い調査報告である。「新・専業主婦志向」とは、「男は仕事、女は家事」という性別役割分業規範を基盤としながら、高度成長期に大衆化を遂げた専業主婦とは異なる「男は仕事と家事、女は家事と趣味（的仕事）」という新たな性別役割分業意識に基づいた専業主婦志向である¹⁾。近年の経済停滞による終身雇用と年功序列賃金体系の崩壊、および、税制や年金制度の世帯単位制から個人単位制への移行についての議論が、次第に現実味を帯びる中、専業主婦の経済的側面を含めた不安定さに対する認識は、現代日本社会において、広く共有されている。にもかかわらず、地域的、学歴および経済階層的に限定される面は否めないにせよ、1960年代後半から70年代前半ま

れの世代を中心とした都市部居住の女性たちの間で専業主婦志向が決して廃れていないことが、この調査結果から明らかにされたわけである。家計補助や自分で自由に使えるお金を得るためにパートタイマーとして補助的労働に従事したり、あるいは、経済的自立を目指していわゆるキャリアウーマンとして男性に伍して働きながら無理して家庭と仕事を両立させるくらいなら、経済力のある男性と結婚し、専業主婦として余裕のある生活を送りたいという若い女性たちのあくまでも選択肢の一つとしての専業主婦願望がうかがえる²⁾。

一方、「新・専業主婦志向」が指摘された時期とほぼ重なるようにして、1995年から1996年にかけて、『VERY』（光文社、1995年6月創刊）、『La Vie de 30 ans』（アシェット婦人画報社、1995年10月創刊）、『Grazia』（講談社、1996年3月創刊）、『Domani』（小学館、1996年12月創刊）といった30代女性向けの雑誌の創刊が相次いだ。高度成長期という右肩上がりの

時代の価値観を内面化した親を持ち、バブル経済と呼ばれた好景気に誰もが浮き足立った80年代に青春時代を送った女性を対象としたこれらの雑誌は、体裁といい、内容といい、20代女性向けファッション雑誌がそのまま30代向けになったかのようである。こうした雑誌の登場によって、30代女性向け雑誌といえば主婦向け生活情報誌という固定的イメージは、払拭されていった。

女性雑誌とは、女性の生き方やあるべき姿について語り、読者たちに、その時代、社会にふさわしいジェンダー規範を迫るメディアである。本論では、これらに新たに創刊された30代女性向け雑誌の中から、主婦を主な読者対象としている『VERY』を資料として、「新・専業主婦志向」に代表される若い女性たちの専業主婦願望が、どのように体现されているかを明らかにしていく³⁾。幸福感に埋め尽くされた誌面に潜む女性たちの悩みや葛藤、ジェンダー規範の根強さなどへも目配りしながら、若い女性たちの専業主婦志向を論じる中で、未婚化、晩婚化の進行する現代日本社会における女性をめぐる状況の一端を浮き彫りにする。

全体の流れを簡単に述べておく。

まず、『JJ』のかつての読者たちをターゲットに『VERY』が創刊されたことを踏まえて、『VERY』の雑誌としての特徴を論じる。次に、毎号多くのページが割かれるファッション記事に着目する。ファッション記事からは、生活感を隠蔽したこの雑誌特有の主婦らしさ、母親らしさが構築されるプロセスを見て取れる。しかも、こうした主婦らしさや妻らしさ、母親らしさは、一人の女性としての美容やファッションへの関心と矛盾することなく表象されている。さらに、専業主婦たちの自己実現が、ランチやお稽古事といった女同士の社交や高級ブランド品の消費に向けられている中で、働くということ、すなわち経済的自立が、どのようにとらえられているかを趣味や特技を生かした仕事の紹介記事を通して分析する。

一方、創刊から5年あまり過ぎた頃からは、離婚や自分探しといった専業主婦の自立をテーマにした記事が登場し始める。『VERY』に描かれる幸福な専業主婦像と矛盾をきたすこれらの記事は、専業主婦という生き方がもはや磐石ではないことを露呈してしまう。

女性の生き方の選択肢が多様になるにもかかわらず、なぜ専業主婦が志向されるのだろうか。新しい専業主婦志向は、フェミニズムが問い続けてきた女性の自立

をめぐる問題をも改めて照射する。女性たちは、専業主婦になることに積極的価値を見出しているのだろうか、あるいは、仕事と家庭の両立の難しさからやむを得ず専業主婦を選択しているのであろうか。この理由を『VERY』を読み解きながら探っていきたい。

2. 『JJ』から『VERY』へ

30代向け女性誌の創刊ラッシュの先頭を切るようにして、光文社から創刊された『VERY』は、同社より発行されている女子学生や20代のOL向けファッション雑誌、『JJ』（1975年～）の元読者層をターゲットに生まれた。『JJ』の表紙や誌面を80年代に飾った黒田知永子をはじめとするモデルたちが、当時と変わらぬ美しさでカムバックを果たしていることや、大学サークルの誌上同窓会や出身校別ファッション紹介記事のような『JJ』を踏襲した読者参加型の誌面構成からも、『JJ』と『VERY』の連続性は明白である⁴⁾。『JJ』の延長線上に『VERY』が位置づけられることから、『VERY』が主婦を対象としながらも、既存の主婦向け雑誌とは一線を画すものであることがうかがえる。

『VERY』創刊号の巻頭を飾った特集記事「大特集 私たちの着る服がない ニュートラ、ハマトラ、サーファー、エレガンス、ニューベシック—あの頃おしゃれだったいまの30代のために」（1995年7月号）は、二子玉川、銀座、大阪、神戸といった都会の街角を背景に自慢のファッションに身を包みながら幸せそうに微笑む読者スナップによって誌面が埋め尽くされ、さながら『JJ』の同窓会版である。

読者モデルのスナップに添えられた紹介文は、「松本好美さん、30歳、東京都目黒区。青山学院大学卒業。ご主人は商社勤務。お子さんは3歳の男の子と10ヶ月の女の子。自由が丘のブティックや海外通販をよく利用しています」、「高木由紀子さん、30歳、神奈川県横浜市。成城大学卒業。ご主人は商社勤務。お子さんは3歳の男の子。動きやすい格好が好きなので、パンツやカルソンをよくはきます」、「山崎勢津子さん、31歳、神奈川県川崎市。聖心女子大学卒業。ご主人は、銀行勤務。結婚前は秘書をなさっており、社内結婚のご主人と2人暮らしです」といった具合である。出身大学や夫の職業、子供の人数など個人的な事柄までもがあからさまに記載され、読む者の興味を掻きたてずにはいられない⁵⁾。

女性の高学歴化には、フルタイム就業型の職場進出と専業主婦化の二極分化を促進する可能性がある。この点を踏まえれば、紹介文に書き添えられた出身校や夫の職業からは、高学歴だからこそ、専業主婦という選択肢を持ち得る層の存在が明らかにされる。読者モデルのプロフィールからは、専業主婦となった高学歴女性たちが、『VERY』の読者層を形成していることが推測できる⁶⁾。さらに言えば、『VERY』が読者層としてターゲットにしたのは、出身校や夫の社会的地位、経済力が、自己のアイデンティティを支える上で不可欠の女性たちである。

『JJ』をはじめとするファッション雑誌をお手本に、海外旅行や高級ブランド品の買物の楽しみを独身時代に覚え、結婚後もこうした生活感覚の水準を落とさず女性たちが、初めて『VERY』を手にした時の思いとは、「私たちの雑誌がやっとできた」の一言に尽きるだろう。創刊直後の投書欄には、『VERY』の創刊を待ちわびていたかのような読者たちの声が全国各地から寄せられている。

「表紙の黒田知永子さんを見て思わず手にとってしまった。JJの頃と全然変わってなくて、とてもうれしいです。私はこんなフケたおばさんになったのに…でも何だか自分の『全盛期』がもどってきたような気がします。(以下略) 宮城県仙台市 穀田あつ子」(1995年8月号)、「十数年前に大学入学のため上京し、ハマトラ、海、テニス、JJと4年間の生活を楽しみました。卒業して地元に戻り、地味な生活を送って、いまは平凡な1児の母親となった私に、何となくわくわくする気持ちを思い出させてくれました。(以下略) 愛知県名古屋 小林宏美」(1995年8月号)、「いわゆる主婦向け雑誌(牛乳パック使用法とか)はいまひとつ合いませんでした。学生時代はJJのお世話になりましたが、『いまの私』に合う雑誌を待っていました。(以下略) 大阪府豊中市 山口奈緒美」(1995年8月号)、「『VERY』を読んで、まるで女子大時代のおしゃれな友人たちと再会したような気分になりました。(中略)最近では年齢や生活の違いからファッション誌にもギャップを感じ、あまり手にすることもなくなっていました。久しぶりに雑誌を読んでみて、自分を再発見したような気分です。(以下略) 大阪府豊中市 山中景子」(1995年9月号)、「JJを読んで育った世代が、いくら結婚したからといって、『節約、節約』といった内容ばかりの主婦雑誌が読めるのだろうか、と

いつも不思議に思っていました。その点、『VERY』は最高です。(以下略) 北海道夕張郡 竹鼻裕子」(1995年9月号)。

これらの投書にあるように、20代向けファッション雑誌の内容には、世代や生活形態の違いからギャップを感じ、だからといって、節約やりサイクルといった生活情報満載の主婦向け雑誌にもなじめないでいた30代専業主婦たちの心をつかむことに『VERY』は成功した。

女性たちが既存の主婦向け雑誌に抱いた違和感や物足りなさや『VERY』に描かれる専業主婦たちの世界こそ、「新・専業主婦志向」と重なる可能性があると考えられる。

3. ファッション記事にみる専業主婦たちの世界

戦後「四大婦人雑誌」と呼ばれた『主婦の友』(主婦の友社、1917年～)、『婦人倶楽部』(講談社、1920～1988年)、『主婦と生活』(主婦と生活社、1946～1993年)、『婦人生活』(婦人生活社、1947～1986年)は、高度成長期の専業主婦の大衆化とも相俟って、あるべき主婦像、家庭像のモデルを提示し続けてきた。しかし、1980年代後半～90年代前半にかけて、3誌が相次いで廃刊を余儀なくされた。唯一残った『主婦の友』も、生き残りを賭けるかのように、1993年2月号よりリニューアルされた。孤独な再出発ともいえるこのリニューアルによって、『主婦の友』は、長い歴史を持つタイトルこそ変わらないものの、ファッション、趣味、医学、娯楽といった総花的な内容から毎日の生活に密着した生活情報誌へと変貌を遂げた。

戦後40年あまり続いた「四大婦人雑誌」時代の終焉とは、落合恵美子の言葉を借りれば、「イメージにおける主婦の崩壊」にほかならない[落合2006-208]。落合は、戦後の女性雑誌における女性イメージの変遷を追う中で、1980年以降の『主婦の友』や『ミス』(文化出版局、1961年～)といった主婦向け雑誌に見出せるモデルの低年齢化、独身者と区別のつかない服装や自由で活動的なポーズの増加、「主婦の少女化」と呼べるほどのかわいらしいファッションの登場を指摘した。このように新たな主婦イメージを提示しようとしたにもかかわらず、「婦人」や「主婦」をタイトルに冠した戦後の代表的な女性雑誌が、時期を同じくして、次々と姿を消していったのは、結局のところ、ミスらしく、主婦らしく、母親らしくするの

はいやだという女性たちが求めるものを、これらの雑誌が上手に掬い取りきれなかったからである。『主婦の友』のファッション記事を排した生活密着型雑誌への大幅な誌面刷新も、読者の心を惹きつけるだけの魅力的な新しい主婦像を、グラビアを通して提示することがいかに困難だったかを物語る。

このように、従来からの主婦向け雑誌が、どのような主婦像を新たに描き出したらいいのか、今一つの絞られずに衰退の一途を辿ったことと対照的に、『VERY』は、『JJ』を雛型にすることによって、「少女化した主婦」たちに外すことなくねらいを定め、『VERY』ならではの主婦像を積極的に打ち出していった。「大人の『可愛い服』『甘い服』」(1995年9月号)や「大特集 私たち世代のファッションスタイル『可愛い服』と『ベーシックな服』」(1995年10月号)のように、『VERY』のファッション記事では「少女」を連想させる「可愛い」という形容が多用され、「可愛いもの好き」を意味する「ラヴリタン」という造語を生み出したほどである⁷⁾。リボンやハート、テディベアなど少女好みのモチーフを使った「可愛いファッション」や「主婦だけのお嬢さん」らしさを醸し出す着こなしの提案によって、『VERY』は、若々しく幸福な専業主婦像を作り上げた⁸⁾。

少女がそのまま大人になったような専業主婦イメージを維持するために隠蔽されなければならないのは、何よりも生活感である。

例えば、『『生活感』を見せないファッション』(2001年10月号)では、実際の年齢よりも若く見えたり、どんな生活を送っているのかそのファッションからは一目見ただけでは判断しかねる読者モデルたちが登場する⁹⁾。着こなしにひと工夫、ふた工夫することによって、掃除、洗濯、買物といった日々の家事や子育てに追われる中で滲み出てきがちな疲れた印象を隠すおしゃれのコツが紹介されている。

しかも、「実は…」と明かされる読者モデルたちの日常は、「子育て奮闘中」「家事バリバリ」「買物上手」と評されることから明らかなように、主婦や母親の役割イメージから決して逸脱するものではない。既存の主婦イメージからは程遠い外見とは対照的に、専業主婦として子育てや家事をきちんとこなすというそのギャップこそが、読者にとって、魅力的に見えるのである。

あくまでも主婦向けにファッションの流行を仕掛け

ることに徹した『VERY』は、独身時代のようにおしゃれを楽しみたいと思いながら、家庭中心の生活を送る女性たちのおしゃれのバイブルとなった。突然の来客にも慌てない普段着や近所までのちょっとした外出向けのファッションはもちろんのこと、子供の運動会や遠足の付き添い、幼稚園の送り迎え、年末年始の親戚や夫の仕事関係への挨拶まわりなどのファッションの紹介記事を通して、主婦として、母親として、妻として、そしてもちろん一人の女として、女性たちが送る日常生活の一こま一こまが、「センスのよさ」を問われるおしゃれの場へと変容を遂げた¹⁰⁾。『VERY』の創刊によって、ベビーカートを押していても、子供連れでもおしゃれな母親たちが増え、街の風景が変わったとまで言われている¹¹⁾。

主婦や妻、母親という立場も、おしゃれの制約になるどころか、いく通りものファッションを楽しむ上で不可欠のものとなる。「実例『1日3回』着替えるルール 30代は毎日がファッションショーです」(1997年10月号)や「特集 毎日の服『立場別』ドレスコード女として、妻として、母として—私たちの服はこう変えなくてはなりません」(1997年11月号)は、家事をする時、子供の幼稚園の送り迎え、お稽古事やスポーツジムへ行く時、友人とランチやお茶を楽しむ時、夫との夜の外出といったように1日の中で立場や状況に応じて何度も着替える読者の実例記事である。

さらに、「ご主人の職業別『妻として』必要なファッション」(2002年12月号)のように、医師や商社、広告代理店勤務といった夫の職業や勤務先すら、ファッションを楽しむために利用してしまう。主婦や妻、母親といった立場を巧みに使いわけることによって、学生時代や独身時代以上に、幅広いおしゃれを楽しむ専業主婦たちの姿が浮かび上がってくる。

しかも、「特集『女同士』のデート服」(2002年12月号)という特集記事に見られるように、おしゃれの舞台となった日々の生活の中で強く意識される他者の視線とは、夫という異性からのものよりも、むしろ学生やOL時代からの友人や同世代の主婦たちから投げかけられるものである。平日の昼間という専業主婦だからこそ自由に使える時間帯に、ランチや映画、買物を楽しむ「女同士のデート」とは、お互いのファッションセンスや美しさを競い合う場でもある。

こうした「女同士の友情」とも呼べる男性不在の女同士の緊密な人間関係は、専業主婦の母親たちに、時



に過剰な緊張感をももたらす。

例えば、「公園デビューの服 大切な社交場で浮かないコツ教えます」(1995年8月号)は、子供を連れて初めて公園へ行く「公園デビュー」についての事例記事である。

「公園デビューのときは、自分の子供と同じくらいの月齢のお子さんに声をかけたことがきっかけになってお母さんたちとの交流が始まりました。いくら洋服がよくても、お母さん同士の話に夢中になり、自分の子供をまったく見ていない人は問題外です。子供の状況をいつも把握していることも公園でのマナーだと思います。アップリケのついたTシャツに同素材のスパッツがこれから公園デビューをする人へのお勧めです」、「いつも行く公園では、挨拶が基本だと思います。子供のおもちゃの貸し借りでも、親が挨拶できないと子供も同様なので、おつき合いができなくなります。デビューのとき、他のお母さんに声をかけられたときのことを思い出して、デビューのお母さんには声をかけようと思います」、「公園で、お友達をつくる秘訣は、「同じ公園の仲間」という気持ちを持つこと。知らない子供でも自分の子供と同じように助けたり、怒ったりと自然に接することが大切。逆に子供べったりで、子供同士のけんかに口を出したり、自分の子供を知らないお母さんはなかなか仲間に入れません」。

このようにこの事例記事では、公園という場にふさわしいファッションから他の母親とのつき合い方に至るまでが、すでに公園通いの経験を数年送っている先輩格の読者モデルによって、事細かに語られている。

また、「幼稚園デビューのためのファッション改造計画」(1998年4月号)も、幼稚園での母親としての着こなしを熟知したスタイリスト役の先輩読者たちが、子供の幼稚園入園を控えた読者モデルのファッションを入園式、父母会・個人面談、遠足、普段の送り迎えのシーン別にアドバイスする事例記事である。「花柄のパンプスは派手で目立ちすぎです」「柄や色使いが派手なシャツはやめましょう」「ロングワンピースは送り迎えにも不可」といった調子で先輩読者たちによって、入園を控えた母親のワードローブに容赦ないチェックが入れられる。

これらの事例記事が如実に物語るように、母親として求められるおしゃれの基準は、「いかに周囲から浮かないようにするか」という点に尽きる。「デビュー」「社交場」という言葉が言い表すように、子育て中の専業

主婦にとって、「公園」や「幼稚園」は、人間関係の広がり期待される場でありながら、その実、閉鎖的な同質集団と化しがちである。母親たちが互いに強い同調圧力をかけ合っていることが、幸福感に満ちた記事から読み取ることができる。

4. 趣味としての仕事

このように専業主婦層を主な読者対象としているため、『VERY』では、通勤や職場向けのファッションが紹介されることは皆無である。『VERY』において、仕事をするとは、あくまでも趣味の延長線上に位置する。これは、「新・専業主婦志向」の「男は仕事と家事、女は家事と趣味(的仕事)」という新たな性別役割分業意識と一致する点である。

「趣味から始める『私の仕事』」(1996年8月号～1997年10月号)、「VERY世代が始めたサロン」(1997年12月号～1998年10月号)、「趣味から始めた仕事：私の場合」(2000年10月号～)といったように、毎号のように登場するのは、趣味や特技を生かして仕事を始めた読者モデルである。ケーブルテレビのリポーターやダイビングスクールのインストラクター、ベットのシッター、ベビーサロン主宰などユニークな仕事も紹介される。しかし、繰り返し取り上げられるのは、料理、お菓子、フラワーアレンジメント、アクセサリー作りなど同世代の女性たちの間で人気の高い趣味の教室やサロンの主宰者である。これらの事例記事では、仕事を始めたきっかけ、1日や1週間のスケジュール、毎月の収支、生徒たちや友人のコメントなどが紹介されている。読者モデルの生活スタイルからは、こうした仕事が、あくまでも家事や子育てに支障のない範囲で行われ、彼女たちが妻や母親としての役割も決しておざなりにしていないことが確認できる。投書欄に寄せられた読者の便りからは、趣味が昂じて仕事となった読者モデルたちが、読者たちにとって、「いつか私も」と生きがい探しを掻きたてる憧れの存在であることがうかがえる¹²⁾。

20代の時に『JJ』の誌面を飾り、その後は、結婚、出産を機に仕事から遠ざかっていた黒田知永子の『VERY』の創刊をきっかけとしたモデルへの復帰も、趣味や特技を生かした仕事の一つの成功例である。「黒田知永子さんの“私の暮らし、毎日の服”」(1999年6月号～2002年10月号)は、モデル黒田知永子のファッションスタイルのみならず、プライベートな生

活も垣間見ることのできる連載である¹³⁾。モデルの仕事を一歩離れば、世田谷区の夫の両親との二世帯住宅で、夫と一人娘、愛犬と共に、主婦として、母親として、妻として、読者たちと何ら変わらない日常生活を送る黒田への親近感こそ、読者たちの中での黒田の人気の理由である。

「家外活動」(「主婦になって始めた、私たちの“家外活動”」2000年6月号)という造語が絶妙に言い当てているように、趣味や特技を生かした仕事は、経済的自立を目指すというよりも、新しい友達との出会いやメリハリのある生活リズムをもたらす生きがいの一つなのである。仕事をするそのものが、趣味的であるといっても過言ではない。逆に言えば、こうした仕事を通して、経済的自立を果たそうと思ったら、相当の覚悟が要求されるということである。働かなくても経済的に余裕のある生活を送れることがステータスとなっている専業主婦が、収支を度外視してまで、夫や家族の協力を得て、趣味や特技を仕事にしていけること自体、彼女たちの豊かな生活を象徴している。

5. 幸せからのドロップアウトと自分探し

友人たちとのランチや習い事、高級ブランド品の消費など経済的、時間的に余裕のある専業主婦の生活を支えるのが、経済力のある夫や双方の実家の存在であることは、いうまでもない。

何のためらいもなく「主人」と呼ばれる夫との関係は、あくまでも円満なものとして描かれる。例えば、「私たちの結婚記念日」(1997年3月号)は、読者の結婚記念日の過ごし方の再現記事である。読者モデルのカップルの紹介文には、結婚記念日はもちろんのこと、夫の職業、二人の出会いのきっかけや結婚に至るまでの交際年数などが書かれ、今回の記念日の夫からのプレゼントのほかに、今までのクリスマスや誕生日、結婚記念日にももらった品々の写真が添えられている。自宅で子供たちと一緒に家族そろって過ごす人、ホテルで過ごしたり、温泉旅行をする人、毎年同じレストランへ行く人、とその過ごし方は様々である。しかしいづれにせよ、独身時代の恋愛に誕生日やクリスマスというイベントが欠かせなかったように、読者たちにとって、結婚記念日は、幸せな結婚生活を再確認する特別な日なのである。

また、「毎朝のご主人チェック」(1996年9月号～1999年8月号)、「ここが不満です 主人のファッ

ション」(1996年5月号～2000年3月号)、「いつもの主人、おしゃれに変えたい」(2000年6月号～)は、妻として、夫の健康や服装にまで気を配ることが求められる記事である。

誌面に描かれる義母との関係も良好である。「義理ママお食事服」のルール」(1999年9月号)、「実例“義理ママとランチ”の合格スタイル」(2001年10月号)は、「義理ママ」と呼ばれる義母との外出やランチの際、嫁として求められる服装や化粧についての実例記事である。特に、「実例“義理ママとランチ”の合格スタイル」では、読者モデルたちによって、スカート丈、肌の露出、派手な化粧など義母に指摘されたことや自分自身が感じたこと、実家の母親に注意されたことなどが挙げられ、清潔感や上品さ、可愛らしさのあるファッションが義母に喜ばれることが明かされている。嫁として気を使う存在であることは違いないが、総じて義母との関係は、「義理ママとランチ」という場面設定自体が物語るように、年の離れた友人か仲のよい実の母娘のように描かれる。いわゆる嫁姑のトラブルに関する記事は皆無である。

この仲のよさは、同居の場合も同様である。「実例『義母と同居』おしゃれの選択」(2000年1月号)は、同居の義母と良い関係を築きながら、自らのファッションを洗練させている4人の読者の実例記事である。同居歴や一戸建てか二世帯住宅かといった同居のスタイルはそれぞれ異なる。しかしいづれにせよ、読者モデルたちは、月に1～2回程度は、買い物やお稽古教室などへ義母と二人で外出する機会を持っていることがうかがえる。

「内面のおしゃれを自然に学べることも同居の利点かもしれません」「常に女性らしさを忘れないお義母様が目標です」といったように、「お義母様」と呼ばれる義母は、ファッション、趣味、ライフスタイルなどあらゆる点において、読者モデルたちに刺激を与え、お手本となる憧れの女性である。

このように『VERY』では、夫婦関係の悩みやトラブル、嫁姑関係の葛藤、性の問題、専業主婦である自分自身への疑問やその立場の不安定さへの言及は、幸せからのドロップアウトを恐れるかのように隠蔽されてきた。とりわけ、専業主婦という立場が、夫から愛され、大切にされてこそ成り立つものである以上、離婚は最大のタブーであった。

このタブーに初めて踏み込んだのが、「幸福な離婚」



(1997年11月号～1998年1月号、3月号)という離婚を経験した読者のインタビュー記事である。結婚生活の破綻は、もう一度、自分の生き方を見つめなおすチャンスとしてとらえられ、金銭的な意味でも「幸福に」離婚を行うために、弁護士費用や引越し代など読者の離婚費用までが公開されている。創刊以来初めて離婚を大きく扱ったこの企画は、読者たちにも驚きを与え、投書欄で賛否両論となる。

VERYを毎月購読しています。「幸福な離婚」を読んでとても勇気づけられました。

去年離婚が成立して、幸せな主婦の雑誌VERYも、もう読むではいけないような気になっていましたが、このコーナーを読み私も読んでいいのだとなんだか嬉しくなりました。私の両親が亡くなっていることから、子供は主人側に。でもいつでも連絡を取ることができますし、会いたいときに会うことができます。幸福な離婚なんてあり得ないと思っていましたが、この離婚は誰にとっても一番良い結果だったと思います。

VERYの読者の方の中にも同じように悩みながら、答えを出した人がいるんだと思うと、とても心強いです。神奈川県平塚市 匿名希望 (1998年2月号)

このように「幸福な離婚」を読んで勇気づけられたという離婚経験者からの声や離婚というテーマを取り上げてこそ、『VERY』も大人の女性の雑誌であるという肯定的意見が寄せられた。その一方で、『VERY』で離婚を取り上げることへの抵抗感も表明される。

初めて手紙を書きました。11月号から新しく始まった「幸福な離婚」。VERYで離婚を取り上げるなんて…と驚いています。私だけでなく、離婚ということ考えた事がある人は多いと思います。私も主人に対して不満に思う事がありますが、でも実際、離婚なんて実家が裕福な場合にのみ、スムーズにいくのではないのでしょうか。私はVERYの中の夢見るような生活を楽しみに読んでいます。それなのに、こういうページは読みたいありません。私のようにVERYを読んでいる人も多いと思います。和歌山県箕島市 匿名希望 (1998年2月号)

「離婚を経験したことで、自分にとって大事なものが何か、はっきりわかったんです。少なくともそれは『お医者様の奥様』という肩書きではなかった」(1997年11月号)、「エリートの嫁として取り繕っていた時期もありました。でも、今がいちばん私らしくまともな生活をしているような気がします」(1997年12月号)といった「幸福な離婚」に登場する離婚経験者たちの語りそのものが、夫の経済力や社会的地位によって支えられた『VERY』の提示する「夢見るような生活」を打ち砕いてしまう。結婚生活を送る中で、満たされないことはある、だからこそ、『VERY』は幸せや夢を与える雑誌であってほしいと切望する読者たちがいたのである。

目をつぶりたくなるような結婚生活の現実を読者たちに突きつけたこのシリーズが4回で終わった後、離婚に関する記事が再び登場するのは、2003年7月号から連載がスタートする「実録・『リセット離婚物語』人生の新たな一歩のために」まで待たなければならない。第1回に登場するのは、かつて『VERY』誌上において、「実例・二世帯住宅物語」(1998年10月号～1999年8月号)を連載していたライターの森綾である。東京都世田谷区に夫の両親との二世帯住宅を建てるまでの一部始終を綴ったこの連載を読んでいた読者の誰もが、森の幸せな結婚生活を信じて疑わなかったはずである。周囲には破綻なく見えた10年9ヶ月にわたる結婚生活が、離婚という結末を迎えるまでを森自らが、さらけ出すかのように語り下ろすこと自体、『VERY』が描く幸福な結婚生活との矛盾を露呈してしまう。

「幸福な離婚」シリーズに登場する読者たちが仮名を使い、顔写真もないのに対し、「実録・『リセット離婚物語』」の場合、登場する読者モデルは、実名のみならず、写真まで堂々と公表している。「離婚」によって、今までの人生を「リセット」し、新たな人生の一歩を踏み出した「リセッターズ」と呼ばれる読者モデルたちへエールを送るこの企画からは、読者たちにとって、離婚が決して他人事とはいえ、自らの結婚生活や人生を見つめる上で、無視できない関心事として認識されつつあることがうかがえる。

中山み登りによる「二度目の自分探し」(2001年9月号～)もまた、『VERY』に描かれる幸福な生活からの脱落や危機と受け取れる出来事の実験が、新たな自分探しのきっかけとして肯定的にとらえられていく連載エッセイである。離婚やシングルマザーの恋愛、子

供の小学校受験の失敗、夫の事業失敗、ガンとの闘病、公園仲間からのいじめ、不妊など、結婚生活を送る中で誰もが遭遇する可能性のある様々な試練を乗り越えて、チャンスや幸せをつかんだ読者と同世代の女性たちが、このシリーズには登場する¹⁴⁾。「公園デビュー」や「幼稚園デビュー」の記事などで女同士の人間関係における同調性が繰り返し強調されたことと対照的に、周囲の視線を気にすることなく、「自分だけの物差し」を持つことこそ、「自分らしく生きる」ことのできる新たな幸せにつながると説かれていく。「自分探し」、それも「二度目」というタイトルそのものが、読者たちの心の奥底に潜んだ迷いを言い当てているかのようである。

もちろん、「二度目」の「自分探し」の意味するものは、必ずしも専業主婦という生き方を否定するものばかりではない。例えば、『『不育症』を克服して手にした、本物の幸せ』(2003年9月号)では、不育症という試練を乗り越えて、無事、出産した女性が、育児休暇の復帰直前に自らの意志で退職し、専業主婦として家庭に入ることを選択する。この女性の場合、不育症という試練と向き合う中で、自分を見つめ直し、自分にとっての幸せとは何かと問いかけた時の答えが、子供の成長を見守るために「家庭に入ること」だった。「職場は女性への制度が整っていて働きやすかったし、収入面でも魅力的」にもかかわらず、あえて、専業主婦となった理由は、「子供のため」ではなく、あくまでも「自分自身が幸せになるための決断」なのである。こうした選択が、試練を克服した末に獲得した「本物の幸せ」とされている。

このように、『VERY』では、創刊から5年あまり過ぎた頃より、「二度目の自分探し」や「実録・『リセット離婚物語』」のように、『VERY』が描き続けてきた幸福感に満ちた専業主婦像と矛盾する連載記事が、誌面に織り込まれ始めている。これらの記事は、専業主婦という生き方が、もはや磐石ではないことを露呈してしまう。しかし、『VERY』は幸せや夢を与える雑誌であってほしいと願う読者たちの期待は、裏切られることはない。「本当の幸せ」をつかむことで大団円を迎える離婚や様々な試練は、新たな幸せへのプロローグであることが強調されている。

6. おわりに

幸せな専業主婦像を提示する『VERY』は、現代日

本社会における専業主婦をめぐる問題を考える上で、格好の資料となる雑誌である。家庭の経済的基盤を夫に支えてもらい、ランチやお稽古教室といった女同士の社交を満喫する『VERY』に登場する幸福な専業主婦たちの姿は、「新・専業主婦志向」と呼ばれる若い女性たちの専業主婦志向を見事なまでに体現する。ファッションの一部であるかのように巧みに使い分けられる主婦や妻、母親として求められるジェンダー役割も、女らしさの魅力を高める上で欠かせないものとして描かれ、決して否定されることはない。

「私たち VERY デビューしました」(1999年2月号)は、デビュタントと呼ばれる結婚間もない読者モデルたちが、結婚することによって変化した生活ぶりやファッションを披露する記事である。「VERY デビュー」「デビュタント」という言葉は、専業主婦になることが、豊かで華やかな生活への第一歩であるかのような印象を与える。しかし、たとえ専業主婦になったとしても、待ち受けているのは、『VERY』の描き出す「夢見るような生活」からは、ほど遠い日常かもしれないわけである。『VERY』は幸せや夢を与える雑誌であってほしいと願う読者たちは、『VERY』の幸福な世界が、専業主婦の大多数にとって、しょせん虚構にすぎないことを半ば承知しているのである。だからこそ、家事や育児の合間の生き抜きに『VERY』を手にとって、まるで自分も読者モデルの一人であるかのように、幸福な専業主婦の世界の擬似体験を楽しみずにはいられないのである。

「新・専業主婦志向」の名づけ親、小倉は、「女性の性的解放と自立を求めるフェミニズムに拒否感を持つ二十代から三十代女性に向けて、やっぱり結婚はいいと思わせる効果に関して、『VERY』以上の雑誌はない。女性が『主体的』に結婚に入っていきようにするには見事な媒体だと感心する。少子化対策に、日本中の未婚女性に政府は『VERY』を無料で配布したらどうかと思う」[小倉 2003 73-74]と述べる。しかし、幸福な専業主婦を描き続ける『VERY』が、専業主婦や専業主婦志向の女性たちの憧れやバイブルであり続ける限り、『VERY』は、専業主婦生活の理想と現実のギャップを物語り続ける存在でしかないだろう。

若い女性たちの専業主婦願望とは、彼女たちが、仕事と結婚生活の両立をしようとするとき、専業主婦になる方がまし、あるいは、専業主婦にならざるを得ないジェンダーをめぐる状況が、日本社会に厳然と存在



することの反映である。未婚化、晩婚化、そして少子化の進む中で、女性の社会的自立や自己実現をめぐる問題を考えていく上で、『VERY』に描かれる幸福な専業主婦像に象徴される若い女性たちの専業主婦志向は、もはや無視することはできない。

〈注〉

- 1) 1997年度厚生科学研究費「女性の未婚率上昇に関連する意識についての調査研究」(研究代表:小倉千加子)で行われた都市部居住の20、30歳代の未婚女性52名を対象とした面接調査の結果に基づく。この調査に関する小倉の率直な感想は、[上野・小倉 2002 30-64]に詳しい。
- 2) 未婚女性の、仕事をしないで物心両面にわたって豊かな生活を送りたいという強い憧れについては、山田昌弘によっても指摘されている[山田 1999b 59-146]。割に合わない「嫌な」仕事をするくらいなら、専業主婦として豊かな家庭生活を送った方がましという若い女性たちの本音が、「新・専業主婦志向」と呼ばれる専業主婦願望には見え隠れしている。しかし、近年の経済不況とも相俟って、専業主婦志向の女性たちに豊かな結婚生活を約束できるだけの収入があり、かつ家事や育児にも協力的な若い男性を見つけることは困難であるのが現実である。このミスマッチが、パラサイトシングルが増大を促し、未婚化、少子化の根本的原因となっているというのが山田の議論である。
- 3) 本稿では、創刊号(1995年7月号)から2003年9月号までの『VERY』を分析対象として用いる。
- 4) 創刊号の表紙を飾った黒田知永子は、『VERY』の看板モデルとして見事な復帰を果たした。なお彼女は現在、40代を迎えた『VERY』創刊初期の読者向けに同社が2002年11月に創刊した『STORY』に活躍の場を移している。また、『JJ』から『VERY』への連続性を意識した記事は、創刊初期に顕著である。誌上同窓会「あの頃の仲間」(1995年9月号~12月号)では、「慶応義塾大学慶球会硬式庭球部」、「聖心女子大学体育会スキー部」、「学習院大学輔仁会硬式庭球部」、「青山学院大学理工ゴルフ部マッシー」といった大学サークルの卒業生が登場し、テニスやスキー、ゴルフを仲間と共に楽しんだ青春時代が懐古されている。「出身校別ファッション研究 学生時代のスタイルは今も残っているか」(1996年6月号)では、慶応義塾、学習院、甲南女子、神戸海星女子学院、帝塚山学院、聖心女子といった大学の出身者たちが登場する。他にも「学生時代も素敵だった、あの人の今 成城OGの“元祖山手”スタイル」(同年6月号)などがある。こうした大学別の読者モデルの起用は、『JJ』においても繰り返し行われている。
- 5) 出身校の記載をめぐるっては、投書欄を通して読者の間で賛否両論となる。「気になったのは、スナップの紹介文に、出身校やご主人のお勤め先が書いてあることです。そのようなプライベートなことよりも、その人の好きなブランドや服選びの基準といったことのほうが知りたいというのが正直な気持ちです。兵庫県神戸市 西村美奈子」(1995年8月号)、「あと、私も紹介文の出身校、ご主人の職業などはイヤな感じがします。京都府京都市 小林ケイ子」(同年9月号)。このように出身校や夫の職業を記載すること

- への嫌悪感が表明される一方で、読者の側から反論の声も上がった。「8月号の西村さん、9月号の小林さんたちのお便りを読んで、ちょっと感じたことがあります。それぞれのキャリアの大部分は、その本人が努力をしてセンスを磨き、地味な日々の積み重ねにより手に入れてこられた正当な評価であり、その方の生き方の成果なのでから、誌面に出身校や職歴、ご主人の職業などを記載するのは、それがさりげない分には、一種の敬意の現れであると思います。私は、いろいろな大学の出身者が生き生きと写真に納まっている姿を見て、30代JJっ子の健在ぶりに大変感激しました。兵庫県赤穂市 田戸悠実恵」(同年10月号)、「紹介文の『出身校』は、私はむしろ楽しんでます。JJのころと比べて学校のカラーの違いはあるのかな、と見ています。そんなことより、『〇歳と〇歳のママ』というほうをやめてほしいくらいです。『ママ』という言葉でみんな同じになってしまうより、出身校のほうがその人の過去を少しのぞいてしまったようでおもしろい。書くか書かないかは、登場読者の希望に任せればいいと思います。愛知県名古屋市 S・S」(同年10月号)。
- 6) 社団法人日本雑誌協会ホームページ (<http://www.j-magazine.or.jp/>) に公表された『VERY』の2002年の読者構成データによれば、読者の学歴の内訳は、高校卒14.6%、短大・専門学校卒(高専含)49.7%、大学・大学院卒34.8%、その他0.9%であり、比較的高学歴層が読者の大半を占めている。さらに、職業の内訳は、フルタイム勤務20.4%、パートタイム1.5%、自営業4.1%、自由業4.0%、無職0.8%、専業主婦60.3%、家事手伝い1.3%、その他7.3%、学生0.3%である。このデータからも、『VERY』の読者層が短大・専門学校卒以上の専業主婦を中心としていることが読み取れる。
 - 7) 他にも「軽くて可愛いカジュアル・コート」(1996年1月号)、「今年の可愛い服はこう変わる」(同年2月号)、「『可愛い服』にワイドパンツを」(同年3月号)、「『可愛い服』はチェックになった」(同年7月号)、「スタイル良く見せる『可愛い服』7つの法則」(1997年11月号)、「ちょっと可愛い横浜スタイル」(1998年3月号)、「やっぱりメークは『可愛い色』」(同年3月号)などが挙げられる。また、「隠れた可愛い物好き」を指す「隠れラヴリタン」の記事には、「東京で、大阪で一「本当は可愛いものが好き」“隠れラヴリタン”追跡レポート」(同年10月号)、「隠れラヴリタンのブランド事情」(同年12月号)、「隠れラヴリタン2000年小物の乱」(2000年4月号)などがある。
 - 8) 「特集 上品さを追い求める30代がたどりついた結論 山手は『主婦だけのお嬢さん』スタイル」(2000年11月号)、「特集 VERY世代のHAPPYスタイルは時間を超えて『いくつになっても可愛い』ファッション」(2002年11月号)。
 - 9) この記事に登場する4名の読者モデルの紹介文は以下のとおりである。「山口麻子さん、一見モード系のファッションモデル風、実は毎日子育て奮闘中の2児のママ」、「近江政子さん、一見休日リゾートで過ごす独身キャリア系、実は家事バリバリの主婦」、「藤田恵さん、一見家事手伝いのお嬢さん風、実は八百屋さんでも「顔」の買物上手な主婦」、「中澤裕美さん、一見クルージング旅行を楽しむ優雅なマダム、実はペイブレードで子供とバトルの毎日」。
 - 10) 「行き先別・読者の遠足スタイル拝見」(1998年5月号)、「『お出かけランチ』の日はこれを着る」(同年5月号)、「送

- り迎えワンピース”着まわし法」(同年7月号)、「実例 マタニティ服に見えないマタニティ服」(同年11月号)、「読者実験試着 ご挨拶まわりの服選び」(2000年1月号)、「行き先別『ランチ服』選びの結論」(同年3月号)、「ベビーカートと合わせるカジュアル」(同年4月号)、「目的別 好感度アップの『お正月』ニット」(2001年1月号)、「私の“運動会”カジュアル」(2002年10月号)、「『学校行事』対応メーク」(同年11月号)などの記事が例として挙げられる。
- 11) 坂井幸雄『STORY』編集長(元『VERY』編集長)の談話(「パブル体験組の40代女性たち 主役感 いまだ健在」朝日新聞朝刊2002年7月23日付)。
- 12) 「VERYの中で私にいちばん影響を与えたのが『趣味から始めた仕事』でした。このコーナーに載っている方々を見るたびにステキだなあと憧れ、私も何かしたいと常々思っていました。好きなこともたくさんあって、手先も不器用なほうではないけれど、それを仕事にするほどではありません。生き甲斐を見つけあぐねてため息ばかりついていましたが、止まっていたは何も始まらないし、とりあえず好きなことから始めてみようというやく踏み出したのが今から2年前。生まれて間もなくの二女を置いていくのは少々気が引けましたが、とにかくできるところまで…とシュガークラフト教室に通い始めました。このたびやっと講師資格をとることができ、シュガークラフトサロンを開くことに。家を新築する際に、自宅で教室を開けるよう設計してもらい、夢の第一歩を歩き始めたところです。大田区 田邊美佐紀」(2001年10月号)。
- 13) 自らのファッション遍歴と私生活を公開したエッセイの中で黒田は、モデルの仕事は周囲が思うほど忙しいものではないが、復帰ができたのは、家族、とりわけ、二世帯住宅の階下に住む義母の惜しみない協力があることを明かしている[黒田2002 129-131]。さらに、普段の生活については、次のように綴られている。「ウィークデイは、朝は子供のお弁当を作り、家族を送り出し、掃除や洗濯の家事をこなす普通の主婦の生活を送っています。午後は子供のお稽古ごとの送り迎えをする日もあります。夕方になると晩御飯は何にしようかしらと買い物に出かけ、自分が食べたいものがあるときはすぐに献立が決まるものの、食べたいものがない日はあっちこっちを右往左往してしまいます。そして、夕食前には愛犬ロビンのお散歩に行くのが日課です。週末は子供の用事や家族の外出と、1日中家にいることは少ないかもしれませんが、こんな日々を送っている私も、負担にならない程度に、月に1回ずつの2つの習い事をしていきます。ひとつは鎌田寛子先生のお料理教室です。もうかれこれ7年ほど通っています。メンバーは子供が幼稚園のころの仲良しママグループ。幼稚園の送迎がなくなると、なかなかみんなで集まる機会がなくなってしまいます。だから、月に1回お料理を習って、友だちと会っておいしいものを食べる、という趣旨で始めました」[黒田2002 135-136]。このような黒田の日常生活は、『VERY』の読者モデル紹介文と見まがうかのようである。黒田の存在そのものが、『VERY』の典型的読者の体現であるといえよう。
- 14) 「お受験失敗で手にした心の処方箋」(2001年9月号)、「子宮ガンを乗り越えて知った幸せの法則」(同年11月号)、「離婚は幸せへのプロローグ。結婚4年目の決断」(2002年1月号)、「もう一度、幸せになりたい! シングルマザー9年目の恋」(同年3月号)、「プチいじめを克服して公園“再”デビュー」(同年4月号)、「夫の事業失敗、嫁姑問題…。試練をチャンスに変えた理由」(2002年5月号)、「7年

の不妊治療でたどり着いた私らしい生き方」(同年6月号)。

<参考文献>

- 中公新書ラクレ編集部編 2002『夫と妻の新・専業主婦論争』中央公論新社
- 原純輔編 2000『日本の階層システム1 近代化と社会階層』東京大学出版会
- 速見由紀子 1999『家族卒業』紀伊國屋書店
- 久田恵 1998『欲望する女たち—女性誌最前線を行く』文藝春秋
- 井上輝子・女性雑誌研究会 1989『女性雑誌を解読する』垣内出版
- 石原里紗 1998『ふざけるな専業主婦』ぶんか社
—— 1999『くたばれ! 専業主婦』ぶんか社
—— 2000『さよなら専業主婦』ぶんか社
- 北田暁大 2004『負け犬たちは何に吠えているのか』『週刊朝日別冊 小説トリッパー』2004年春季号: pp. 306-309 朝日新聞社
- 厚生省監修 1998『厚生白書(平成10年版)』ぎょうせい
- 国広陽子 2001『主婦とジェンダー』尚学社
- 黒田知永子 2002『チョコ・バイブル』光文社
- 目黒依子・矢澤澄子編 2000『少子化時代のジェンダーと母親意識』新曜社
- 宮島喬編 2000『講座社会学7 文化』東京大学出版会
- 本山ちさと 1995→1998『公園デビュー』学陽書房
- 諸橋泰樹 1993『雑誌文化の中の女性学』明石書店
- 落合恵美子 1994『21世紀家族へ』有斐閣
—— 2000『近代家族の曲がり角』角川書店
- 小倉千加子 2003『結婚の条件』朝日新聞社
- 小倉千加子・山本文緒 2004『特別対談 結婚の『条件パブル』は止まらない』『週刊朝日別冊 小説トリッパー』2004年春季号: pp.90-97 朝日新聞社
- 斎藤美奈子 1999『あほらし屋の鐘が鳴る』朝日新聞社
—— 2000『モダンガール論』マガジンハウス
- 酒井順子 2003『負け犬の遠吠え』講談社
- 盛山和夫編 2000『日本の階層システム4 ジェンダー・市場・家族』東京大学出版会
- 主婦の友社社史編纂委員会 1996『主婦の友社八十年史』主婦の友社
- 竹信三恵子 1999『女の人生選び』はまの出版
- 利谷信義・湯沢雅彦・袖井孝子・篠原英子編 1996『高学歴時代の女性』有斐閣
- 上野千鶴子・小倉千加子 2002『ザ・フェミニズム』筑摩書房
- 歌代幸子 2002『音羽「お受験」殺人』新潮社
- 山田昌弘 1999a『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房
—— 1999b『家族のリストラクチュアリング』新曜社
—— 2001『家族というリスク』勁草書房
- 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子 2003『都市環境と子育て』勁草書房
- 吉澤夏子 1993『フェミニズムの困難』勁草書房
—— 1997『女であることの希望』勁草書房

(いしざき・ゆうこ 日本女子大学人間社会学部現代社会学科助手)